アジアを駆ける

第4部 大学「入亜」のススメ ④

高水準大学で武者修行

「上から目線」は時代遅れ

「クラスメートは現地の官僚が多く意識が高い。世界銀行の人たちと出会う機会も多い。刺激とチャンスに満ちた環境」。神戸大大学院国際協力研究科修士1年の竹田孝紀さんは留学先にインドネシア大を選んだ。

国際協力の専門家養成を目指す同研究科は2007年、欧米や韓国、インドネシアの大学と提携、二重学位制を設けた。海外の大学で1年間学んだ後に神戸大でもう1年学べば、2つの大学で修士号がとれる。これまではアジアからの受け入れが中心で、日本からの留学は欧米ばかり。だが竹田さんに迷いはなかった。

目標は国際機関でアジアの開発に携わること。学んだ知識を実践するには「アジアの政治、経済、社会を肌で知る必要がある」。トップ大学で、政財界に人材を輩出するインドネシア大はベストな選択肢だった。

授業は英語なので不自由は感じない。学生や教育の水準は「旧帝大と同水準」。関東の有力大が視察に訪れ、インドネシア大の学部生とディベートするところを見たが、「日本の学生が完全に圧倒されていた」。

もし後輩に相談されたらこう助言すると決めている。「留学先は欧米という感覚はもう時代遅れだ」と。

発展を続けるアジアに留学生を送りだそうと、関西の大学が知恵を絞っている。新たな留学プログラムを導入し、学術交流も増加。専門知識を身につけようという学生も増えている。

「これだけの環境は他にない」。神戸大工学部4年生で、水処理などに使う膜技術が専門の北村晶さんは10月、台湾・中原大に留学した。大学院入試に失敗した北村さんは再受験までにレベルアップを目指し、台湾に来た。

きっかけは指導教官の松山秀人教授の勧め。「膜技術で世界有数の拠点」という言葉にひかれた。中原大は産官の支援で専用の研究棟を3つ建設。水メジャーの仏ヴェオリア・ウォーターなど外資との共同研究も積極的だ。神戸大には日本で唯一の先端膜工学センターがあるが「ビルのフロアいっぱいの大型装置はない」と北田さん。

教授も19人と多く、学生の指導もきめ細かい。膜技術を自分たちで切り開くという熱気に満ちている。「台湾で進学してもいいかな」と思うときもある。

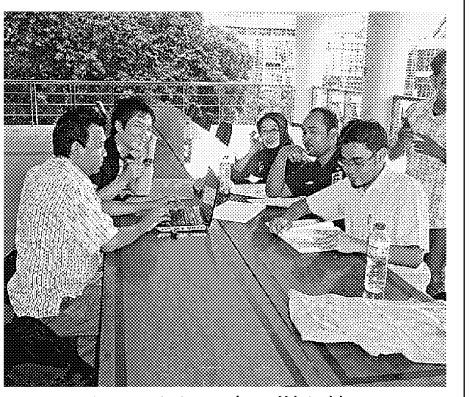
大阪府立大はタイの泰日工業大から留学生を受け入れる一方で、来年度に日本の学生の派遣を検討している。競技会用のソーラーカーやロボットの製作を通じて学生を鍛える「プロジェクト型教育」に参加、学生のレベルアップにつなげる狙いだ。米国のロボコンで注目され、実践的な教育法として広まってきた。

泰日工大はタイの日系企業で役立つ人材を育てるために、日本とタイの経済界が設立した。ものづくり教育に力を入れている。プロジェクト型教育はその一例で、視察した伊藤智博教授は「予算も支援体制もすごい」と言う。

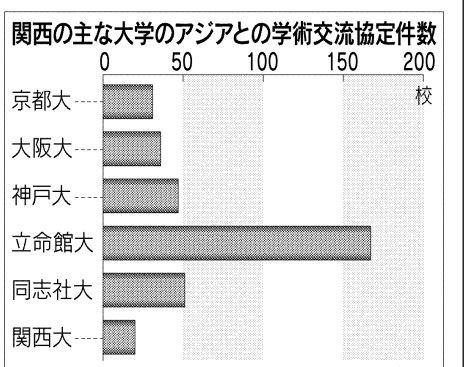
大阪府大の奥野武俊学長は「上から目線はもう終わり」と話す。大学もアジアとの共生・共育を意識しする時代になった。

＝第4部おわり

青木慎一、長谷川章、神谷浩司、合田義孝が担当しました。



インドネシア大で学ぶ竹田孝紀さん（左から2人目）



（注）大学間だけ。学部・研究科間などは含まず。内容は大学間で違いがある

掲載日 2010年12月28日 日本経済新聞 地方経済面 近畿B

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。